

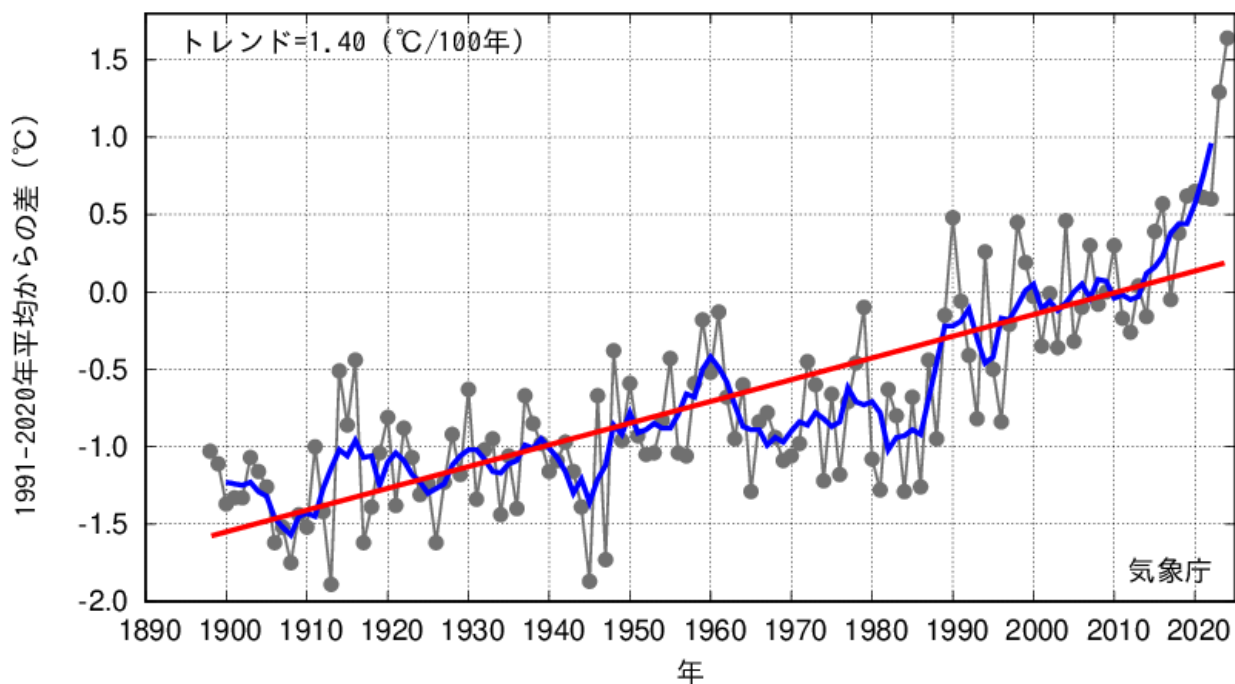
昨年は1月1日の能登半島を震源とする大地震での幕開けとなりましたが、本年はエルニーニョの影響、北半球では偏西風の北上などの影響で日本付近では西高東低型の気圧配置の強まり、日本海側では降雪が強まり、太平洋側でも晴天・乾燥となるも北西の季節風の強い日の多い幕開けとなりました。世界的にもヨーロッパや北米で台風並みの低気圧の発生で降雪や降雨による被害や、北米西岸LAでの森林大火災のニュースが報じられていますが、年初だけで平穏な一年となって欲しいと念じる次第です。

ところで、本シリーズも今年で5年目、如何にしようかと思いましたが「ボケ防止」を目的として{花}に限らず気の向くまま、何時まで続くかわかりませんがメモ書きとして書き流して行こうと思っていますが……。ご迷惑かも知れませんがお付き合いの程よろしくお願いいたします。

1. 昨年 2024 年の気象について

- ・気象庁は12月25日に2024年度について、「全国的に気温の高い状態が続き、日本の年平均気温偏差は+1.64℃(1～11月の期間から算出した速報値)と、統計を開始した1898年以降、これまで最も高い値であった2023年の+1.29℃を大きく上回り、最も高い値となる見込み」と発表致しました。
- ・同時に発表された「日本の年平均気温偏差」図は下記の通りです。

日本の年平均気温偏差



- ・日本の新平年値が採用された2021年以降、急激に気温が高くなって来ていることがわかります。
- ・近畿圏6県については、2024年の年平均値の予測値を12月の科内研修会時に推定値として表示致しましたがこの予想値通りで 大阪・神戸が18.4℃(平年17.0)、京都17.9℃(平年16.2)、奈良17.3℃(平年15.7)、和歌山18.2℃(平年16.9)、彦根16.7℃(15.0)でした。何れも観測史上最高値となった2023年を上回り記録を更新致しました。
- ・この傾向は、日本のみならず全球的な傾向で本年1月10日にEUの気象機関から下記のように発表さ

れています。

***2024 年世界の平均気温が 15.1 度で過去最高に 温室効果ガスの増加・2023 年に発生したエルニーニョ現象など指摘**

2025 年 01 月 10 日 19:26 [FNN プライムオンライン](#)

2024 年の世界の平均気温が、観測史上最も高くなったことが分かりました。

EU（ヨーロッパ連合）の気象機関「コペルニクス気候変動サービス」によりますと、2024 年の世界の平均気温は 15.1 度で、これまで最も高かった 2023 年を 0.12 度上回り、2 年連続で「最も暑い年」の記録を更新しました。

また産業革命前と比べ、気温は 1.6 度上昇し、温暖化対策の国際的な枠組み「パリ協定」が目標に掲げる上昇幅 1.5 度以内を超え、目標達成は危機的な状況であるとしています。

2. 「パリ協定」について

ご承知の方もいらっしゃるかと思いますが・・・解説しておきます。

*パリ協定とは

パリ協定とは、2015 年 11 月 30 日から 12 月 13 日までの期間にパリ郊外で実施された「国連気候変動枠組条約第 21 回締約国会議（COP21）」にて採択された国際条約です。気候変動に関する国際的な目標・取り組みが定められ、2016 年 11 月 4 日に発効されました。

***パリ協定においては、長期的な目標として、**

【世界的な平均気温上昇を産業革命以前に比べて 2℃より十分低く保つとともに、1.5℃に抑える努力を追求する】こと、またそのために、できるかぎり早く世界の温室効果ガス排出量をピークアウトし、21 世紀後半には、温室効果ガス（GHG）排出量と（森林などによる）吸収量のバランスをとる、即ちカーボンニュートラルを実現することが定められ、これが世界共通の目標となっています。

*これらの目標を達成するため、2020 年から各国が取り組むべき検討・支援などが国際的な枠組みとして示されています。なおこの気候変動枠組条約には、世界 196 カ国が加盟しています。勿論日本も参加国のひとつとして批准しています。

・パリ協定では、これを受けて、各国が排出削減目標を定め、温室効果ガスの削減を進めています。また「自国が決定する削減目標（NDC：Nationally Determined Contribution）」を、2020 年以降、5 年ごとに提出することが義務付けられています。

*日本の「パリ協定の長期戦略」

日本では、2030 年度の温室効果ガスの排出を、2013 年度（*注：排出量が最大であった年）を基準として 26%削減することを中期目標として決めました。これがパリ協定において従来日本が国際的に約束した従来の温室効果ガスの削減量ということになります。（2013 年の **GHG 総排出量は 14 億 800 万トン**）ところが、各国が提出した NDC では、目標達成には程遠いとして、最近の **COP28**（2023 年 11～12 月、UAE・ドバイ）で初めて採択された「パリ協定」の進捗状況を評価する仕組み「グローバル・ストックテイク」において、温暖化を 1.5℃に抑えるため、世界全体の温室効果ガス排出量を「**2019 年比で 2030 年までに 43%、2035 年までに 60%削減する**」必要性が指摘されました。

*最近の日本政府の動き

日本の地球温暖化対策をめぐっては「2050 年カーボンニュートラル」宣言を受け、2021 年 4 月に「2030

年度に温室効果ガスを 2013 年度から 46%削減することを目指す」とし、さらに上記の「2035 年、温室ガス 60%減」に対して、12 月 24 日、環境・経済産業両省の審議会で両省が示した改定案を大筋で了承されました。次期削減目標は「2035 年度、2013 年度比 60%減、40 年度 73%減」として、近地球温暖化対策推進本部（本部長、石破首相）に対し上記計画案を示しており、意見公募を経て正式決定されます。

＊2025 年 2 月国連提出の施策等正式な内容等は近々公表されるでしょう。

（注：以上は三井物産（株）Green&Circular 及び毎日新聞 2024 年 12 月 25 日の記事を引用 ）

3. 今年の冬季の気象

神戸の冬季気温℃

今季の冬期の気温の経過状況の例として住区に近い神戸気象台のデーターを右に挙げておきます。気象庁の予報通り平年より若干低い結果となっている。一方降雨量に関しては 12 月は 0.5 mm（平年 48.7 mm）、1 月 6 日に 20.5 mm と少雨の状況が続いています。

期間	12月上旬	中旬	下旬	1月上旬
平年	10.3	8.5	7.6	6.6
2023年度	10.1	7.3	6.4	7.3
2024年度	10.9	11.0	7.4	7.6
2025年度	10.7	7.7	7.5	6.0

4. 近畿地区の 3 ヶ月予報（大阪管区気象台 12 月 24 日発表）

- ・全球的には地球温暖化の影響を受けやすい。またラニーニャに近い現象は継続する。
- ・日本付近では期間の前半は上空の偏西風が日本付近で南に蛇行しやすい見込みです。アリューシャン低気圧が西側で強い時期があり、シベリア高気圧は南東側への張り出しが強い時期があるでしょう。日本付近は冬型の気圧配置が強く寒気の影響を受けやすいでしょう。

期間の後半は偏西風が日本付近で平年の位置を流れやすいでしょう。アリューシャン低気圧やシベリア高気圧の張り出しが弱まり、日本付近は冬型の気圧配置が弱く寒気の影響を受けにくいでしょう。

- ・上記の予想から近畿地区の向こう 3 か月の気温は、期間の前半は寒気の影響を受けやすいですが、期間の後半は寒気の影響を受けにくくなるため、平年並か高いでしょう。冬型の気圧配置が強まる時期があるため、近畿日本海側では、向こう 3 か月の降水量と降雪量は、平年並か多いでしょう。近畿太平洋側では、低気圧の影響を受けにくいため、向こう 3 か月の降水量は平年並か少ないでしょう。

＊近畿太平洋側の月別の予報

- ・1 月：冬型の気圧配置が強まる時期があるため、日本海側では、平年に比べ曇りや雪または雨の日が多いでしょう。近畿太平洋側では、低気圧の影響を受けにくいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

気温：低いか平年並み 低 20、並 40、高 20% 降水量：少ない 少 40、並 40、多 20%

- ・2 月：近畿日本海側では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温：ほぼ平年並み 低 30、並 40、高 30% 降水量：少ない 少 40、並 30、多 30%

- ・3 月：近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温：高い見込み 低 20、並 30、高 50% 降水量：少ない 少 40、並 30、多 30%

以上、気象絡みの記述からはじまりましたが、既に沖縄地区の桜開花情報や気象会社の今年のサクラ開花予想なども発表されていますので、これ等から記述してゆきます。

5. 「カンヒザクラ」の開花

奄美・沖縄地区の気象庁・生物季節観測のサクラ基準樹種としては**カンヒザクラ**が選ばれているが、下記2ヶ所での開花が報告されている。

- ・沖縄・那覇 開花日1月5日、平年より11日早く、昨年比も8日早い。
- ・宮古島 開花日1月6日、平年より11日早い、昨年よりは1日遅い。
- ・沖縄・奄美地区の12月の気温は平年より若干低目でありなぜ早い開花となったのかは不明。今年はこの地域の気温も1~2月は平年並みか若干低目に推移するとの予報であり、満開も記録されると思われる。



6. 今年のサクラ（ソメイヨシノ）の開花予想

前記の気象庁の今後の気象予報を受けて、**日本気象株式会社**は、1月9日に2025年第1回桜の開花・満開予想を発表しました。概要は下記の通りです。

全国的に平年並みの開花に

今シーズンは10月から11月にかけて気温が高かったため、全国的に休眠打破の時期は平年より遅くなる見込みです。休眠打破後は平年より高めの気温が予想されており、花芽が順調に生長し休眠打破の遅れを取り戻すため、全国的に平年並みの開花となるでしょう。

3月22日に高知・福岡・鹿児島で開花がスタートし、続いて関東甲信地方、東海地方、中国地方でも続々と開花し始める予想となっています。高知・福岡は平年と同じ、鹿児島は4日早い開花の予想です。東京では、平年と同じ**3月24日**頃に開花を迎える予想です。（他社は東京が3月21日としている）

[東日本・西日本]

10月から11月にかけては平年よりかなり高め、12月は平年並みの気温でした。10月から11月にかけての高温の影響で休眠打破の時期は1週間程度遅くなる見込みです。1月は平年並みか平年より高め、2月から3月にかけては平年より高めの気温が予想されています。開花時期は平年並みでしょう。

個人的には、この付近では11月下旬以降平年を下回るか平年並みの気温が続いているので、昨年のような「休眠打破」の遅れはないと思っています。2月、3月の気温次第でしょう。

7. ジュウガツザクラ

品種名の通り、以前は晩秋に咲き冬季にはお休み早春に再び開花する2度咲きの桜であると思っていた。近年は、暖冬の所為か晩秋に咲いた後、冬季でも少数ではあるが花が咲き続け、春季に再び多くの花を一斉開花する現象が見られていた。ところが今年の開花の状況は異常、秋季の異常高温の影響か秋の開花時期が遅れ11月末、最近でもこの時期には花数も少なくなっていたが、今年は年末から花数が増えだし1月10日現在右のように多数の花が見られている。この現象はコブクザクラも同じようであるように思われる。



8. ソメイヨシノの揚水

既に、落葉樹は冬芽の展開前に根からの揚水が必要であることは、昨年「花だより」で詳述しています。ソメイヨシノも例外ではなく、昨年度は1月末に、樹皮表面に樹脂状物が固化する現象から察知致しました。今年は？と散策路の桜並木など注意して見ていたところ、早くも1月9日に数本の樹で、写真のような揚水痕を観測致しました。今季はこの附近では前述のように12月は降水量ゼロ、1月6日に20mm程度の降水があり、横根の発達したソメイヨシノが早速揚水したものと考えられました。



9. ツバキ科の花

9-1. ツバキ類

この附近では野生種であるヤブツバキも少数ではあるが見られますが、「乙女ツバキ」などの園芸品種の方がよくみられます。ここ数年は年末にも開花が見られる品種もありましたが今年は全く見られません。これも昨年の秋の高温の影響、蕾の生成の時期が大幅に遅れた為であることは明らか。ヤブツバキなど今年は文字通り春の花となるのでしょうか。

9-2. サザンカ (*Camellia sasanqua*)

花木の花の少ないこの時期、目立つのはサザンカの花である。この附近では、12月中旬以降に開花が見られるようになり、年末から花数を増やし1月中旬に入ったこの時期に満開？の状況である。11月の科の箕面観察会時には何時も開花していたことを思うと今年は1ヶ月以上も遅れているのではないのでしょうか？この原因も上記のツバキ類と同じく、秋期の異常高温で蕾の生成時期の遅れでしょう。



なお、サザンカは漢字表記では「山茶花」、これは中国語でツバキ類一般を指す山茶に由来し、サザンカの名は

山茶花の本来の読みである「サンサカ」が訛ったものといわれる。もとは「さんざか」と言ったが、音位転換した現在の読みが定着した⁹⁾。ツバキ属の一種であるが、ツバキ（ヤブツバキ）よりも花がやや小形であることから、ヒメツバキやコツバキなどの別名もあります。また、漢名は茶梅であるとのこと。

自生種は白花一重、日本の本州山口県、四国南西部から九州中南部、南西諸島（屋久島から西表島）などに、日本国外では台湾、中国、インドネシアなどに分布する。山地に自生するほか、人手によって植栽されて庭でもよく見られます。また園芸種も多く「カンツバキ」などはその代表。

なお、ツバキ科の植物は熱帯から亜熱帯に自生しており、ツバキ、サザンカ、チャは温帯に適応した珍しい種であり、日本は自生地としては北限であるとされています。

なお、「山茶花」全般の花言葉は「ひたむきさ」「困難に打ち勝つ」です。これは、冬の寒さに負けずに花を咲かせることに由来するといわれています。

9-3. タイワンツバキ (*Gordonia axillaris*)

ワンツバキはタイ、中国南部、台湾、ベトナムを原産とする常緑の高木。現地では15mほどに成長する樹のようですが、附近では邸宅の前庭に3mほどの樹1本が見られるだけです。通常、日本での花期は11月ごろとされていますが、今年は12月下旬から次々と咲いて来ています。花は直径8cmくらいで白色、雄しべは黄色く、雌しべが雄しべの中から顔を覗かせています。この花の様子から英名は「目玉焼き (Fried egg tree)」。果実は長さ2cmくらいの卵形で5裂し、中には翼のある種子が多数入っているとのこと。翼がある種子というのもツバキ科にはあまりない特徴とのことですが残念ながら結実は見られません。



10. 加温テストの途中経過

昨年12月にお知らせした「2024年花だよりー18」で、Sさんなどから頂いた、「冬芽」などに関する疑問などを試してみようと12月25日より加温テストを始めました。テストにはソメイヨシノなど6種7本を広口ビンに生け、室温下で観測をして来ています。生けている場所の温度は中間23℃程度、床時で17℃程度ですので、平均20～21℃程度ですが、試験開始から10日程度で一部の芽の先が緑色に変化してきました。1月14日で加温20日、400℃・Dayとなりますが、変化したのはブナ科のコナラとアベマキの2種、他は今のところ変化は見られません。この2種の試験開始時と現在の「芽」の状況を並べておきます。

*コナラとアベマキの変化



頂芽は動いておらず、側芽が変化
葉ではなく花・花序であるよう
に思われる。

アベマキは側芽も若干成長しているが、それ
以上に頂芽の伸長が著しい。

以上

